慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	独逸社会主義の二傾向
Sub Title	
Author	阿部, 秀助
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1918
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.12, No.11 (1918. 11) ,p.1598(112)- 1601(115)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	雑録
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19181101-0112

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

註二、Locke:— "Two Treatise on Government". Book II ch. v. Sec. 40

註三、前掲 Kaulla: —S. 76 ff.

高橋教授「ツヨシ、ロックの利子學說」（「三田學會雜誌」第十二卷第八號及第九號）參照。

註四、前掲 Kaulla:— S. 266 f.

註五、福田博士著「英國の學問としての經濟學殊に商國主義の始終」（「經濟學考證」第八編）參照。

註六、前掲 Kaulla:— S. 101, 104.

註七、同上 S. 268.

（未完）

獨逸社會主義の二傾向

阿部秀助

獨逸社會民主黨の歷史を通觀せし人には、其間二箇の傾向即ち只だ眞一文字に終極目的を實現せんとする傾向と所謂、現實其著に執着する傾向の存することを認むるを得るのである、先づ前者の傾向に就きて見るに同黨初期の歷史は最近「ラッドロフ」の云つた如く極めて理想的即ち終始目的に到達せんとする努力に充ちたもので、之れを當時の人物に求むる時は「カール、マルクス」とか、「ブリードリッヒ、エングルス」とか「アウグスト、ベーベル」の如き所謂社會主義上に於ける「ロマンチケル」である、更に之れが思想上の基礎をなせるものは千八百四十七年に於ける共產主義の宣言書及千八百九十一年に於ける「エルフルト」の社會民主黨宣言書である、殊に前書が當時の社會主義にとりて一個の信條となり、革命の烽火と見做された所以は、其實、當時に於ける獨逸の資本主義なるものが殆んど有名無實の狀態を呈してゐたことが之れが有力な源因である、現に之れが一面を證明するものは千八百四十八年の革命で、此革命たるや一般人民によりてなされたものと評し得るも、決して社會主義的無產者階級によつて齎らされたものではないのである、然るに以上の理想的態度を排して實際的意義を重んずる傾向は漸次同黨の內部に發生するに至り、殊に此點を最も鮮明に現はしたものは千八百九十年「エルフルト」の社會民主黨大會に於ける「フォルマル」の所論である、此所論の要旨は若、社會民主黨をして其主張を貫徹せしむる爲めには只だ單に理想の夢に憧憬することを止めて、實際上世を動かすに足る勢力を有することが必要であると云ふのである、而して此言說が「ベーベル」によりて批難攻擊せられたに不拘、爾來、此傾向は益々甚しきを加ひ「ベルンスタイン」の如き「ドクトル、ダヴィード」の如き熾んに、よりよき將來よりも、よりよき現在に着目するの必要を論ずるの士が輩出するに至つたのである、而して彼等が單に終始目的を夢みるを以て非なりとした有力な理由は「マルクス」等の主張が其後に發生せし幾多の經濟的事實と符合せぬと云ふ點である、即是ち等の有力な事實として指摘せられたものは（一）農業上に於ける小經營が自然的に廢滅すとなすは學理上、確論と稱するを得ざること、（二）勞働の機會を求むること能はざる勞働者の益々大なるに至る可しとの推論には疑問の餘地存するとともに資本家階級と無產者階級との間に存する階級戰が近世社會を二個の反目せる狀態に分たしむるに至る可しとの說も正當にあらざること、（三）所謂經濟的恐慌が其範圍を暫時弘くするに至ることは絕對的不可能にはあらざるも然かも幾多の理由よりして尙ほ疑問の餘地存すること、（四）生產的手段の私有が現時に於ける農民の富を奪掠する手段たりとの說は學理上、確乎たるものとして認定すること能はざること（五）社會主義の上に築かれたる社會的變化が一に勞働者階級の事業たりとの說も實際の事實と

適合せざること。以上の事實は社會民主黨中、識見ある徒をして暫時、共產主義の宣言書によりて發布せられた「將來の國家」に對する信仰から遠ざからしむるに至つたのである、勿論、現時の社會主義的理論家の中には、「カール、カウッキー」、の如き社會的革命に對する信仰を捨てざる徒がないではない、現に彼れは千九百二年、和蘭の「アムステルダム」及「デルフト」で社會的革命に對する一條の講演をなし、且つ此兩講演は其後「社會改良と社會的革命」「社會的革命以後の日」なる二篇よりなる「社會的革命」なる名稱の下に公にせられたのであるが、彼れを知るもの、多くは彼れが「エヅアルト、ベルンスクイン」の徒と異なつて、餘り實際的智識を有しない一個の學究に過ぎぬと偏するものが多いのである。現に伯林大學の「フランツ、オッペンハイマー」の如きは最近「社會問題と社會主義」の中に彼れに飽き足らざる點を指摘してゐるのである。更に「ベルンスタイン」の「伯林勞働者運動史」によれば同市の社會民主黨が自治體の選擧に參加したのは既に千八百七十八年のことで、千八百八十三年には社會黨の中で非常に人望を博し且つ同黨の中央機關紙たる「フォアウェルト」の主幹であつた「ジンガー」と「ツツァウエル」とが伯林市會議員に選出せられ、斯くの如き狀態は單に伯林市のみに限られないで等しく獨逸の各地方に見る現象となつたのである、其結果は又た社會民主黨大會の上に著しき影響を與へたのである、即ち千九百二年の大會に於て「ドクトル、ユーゴー、リンデマーン」は自治體政策に關して一條の報告をなし、千九百四年「ブレーメン」の會合には自治體に對する問題が黨議の重要な部分を構成するに至つたのである、斯くの如きは明かに實際的意義を重んずる傾向の大なるに至つたことを示すものである、又、事實上に徵するも千九百十年頃の大伯林の一部たる「シャルロッテンブルグ」の市會議員の如きは大多數、社會民主黨に加入せしものであるが、然かも彼等のなす處は「マルクス」一派の理想を實現せんとするよりも、寧ろ遙かに實際的で、例者、同市の小學校生徒の中、營養不充分の者の爲めに特に學校內に食堂を設けて是等の貧しき小國民を賑はしたに過ぎないのである、更に伯林在住の勞働者に向つて彼等が、社會民主黨に加入せし理由に就いて質すと、彼等は異口同音に「マルクス」崇拜熱よりも、寧ろ自己の賃金を增加せしむる手段たることを答ふるのである、斯くの如く Die lebenden Geschlechter wollten nicht nur arbeiten, sondern auch ernten が多數の意識たる場合に於て、社會民主黨が此方面に深き注意を拂ふことは避く可からざることで、恐らく戰後に於ける社會民主黨は獨立社會黨分離の結果として益々現實的政策に沒頭するに至ること、思ふ。